

「愛猿記賞」【大賞】

「私の父と座頭市」 北海道 小坂真奈美

我が家から一時間程車で走ると、石狩市の厚田に着く。小さな町だが、豊かな食文化と海の見える景観や小高い丘に建ち並ぶ家々が絵本のページを開いた様に可愛らしく毎年訪れている。新しく出来た道の駅もあり、町はどこも人で賑わっていた。道の駅の二階には厚田出身の名士の展示があり、歴史や人物の紹介を見ている時にふと足が止まった。作家子母澤寛氏の作品「座頭市」を演じた時の勝新太郎氏の写真があり、懐かしい心持になった。

後日、本に詳しい友人に聞くと意外にも原作には乱闘シーンは殆どないと分かった。私の「座頭市」の記憶は目の見えない坊主頭の主人公がいつも粗末な着物で杖を頼りに歩いている。盲目の座頭市だが、杖の仕込み刀を抜くと相手は何人いても一人で倒す無敵さだ。弱者の為に敢然と一人で戦う姿が鮮明に蘇る。普段は只のあんまだが、いつしかその風貌と強さからならず者の間で恐れられる存在になる庶民派ヒーロー。それにしても、こうもしっかり記憶に残っている「座頭市」のシーン。私がテレビで見ていたのは小学生の頃だった。女の子が好んで見る作品ではないのに、思い当たるふしがあった。それは私の父だ。

自称、九州男児で武士の出の父は九州で商売も勤め人も上手くいかず、止む無く家族で北海道に移り住んだのは長女の私が五歳の時だ。住み慣れない土地に初めての炭鉱夫の仕事は想像を遥かに超える苦闘だっただろう。若い両親はよく喧嘩をしていた。怒鳴りだす父に負けてない母。父の投げた食器をかわし投げ返す母。我が家の乱闘シーンは「こんな家にいられるか。」父の捨て台詞で幕を閉じ、家を出ていく。今思えば残された母はいつも不安だったに違いないが、私達の前では決して泣かない強い人だった。大概是次の日、何食わぬ顔をして、頭を坊主に丸めた父が帰宅する。私達三姉妹が「お父さん、頭どうしたの？ 可笑的い。」話し掛ける声に母が「本当だ。可笑的いよね。」と笑い出すと仲直りの気配を感じて安心した。丸顔の坊主頭の勝新太郎氏を見て、懐かしい気持ちになったのはその時の父に似ていたからだ。

その後、三八歳の時に炭鉱の落盤事故で一カ月間生死の境を彷徨った。一命は取り留めたものの脊髄損傷で生涯半身不随になった父はお酒を飲んで泣いていた。やんちゃで負けず嫌いで涙もろくて優しい父は、「座頭市」にきくと憧れていたのだ。それは元には戻らない車椅子の父と私達家族の憧れだったのかもしれない。八十歳を過ぎ長年の車椅子生活で床す

れが悪化し高熱が続く父は数年前から入院している。「この身体で辛くて死にたかったけど、子供達が心配で死ねなかった。」初めて告白する父に私は思う。ヒーローじゃなくて良い。今も生き抜いてくれているだけでお父さん、ありがとう。